

## 第9部門（社会・文化土壌学）

社会・文化土壌学部門は、社会・教育部会と文化土壌学部会の2つの部会から構成されています。

社会・教育部会は、人間の生存にとって欠くことのできない土壌の重要性についての社会的理解・認識を高め、深めるための研究を行う部会であり、長年の実績が高く評価されている土壌教育活動をさらに発展させます。また、土壌に関連する科学的知識を社会的に広く普及するとともに、環境教育とも密接に関連しながら、小・中・高等学校教員・市民を対象に、土壌に関する教材・教育法の開発研究や普及、教育体験発表などを進めることを目的としています。土壌・肥料・植物栄養学に関係する地域活動への協力等も積極的に進めています。

関連する活動としては、1999年刊行の『土をどう教えるか—新たな環境教育教材』（古今書院）を10年ぶりに改訂し、本学会土壌教育委員会編『新版 土をどう教えるか—現場で役立つ環境教育教材—』上・下2巻を2009年10月に古今書院から刊行しました。上巻は小・中学校向き、下巻は高等学校向きの内容からなり、全15章、観察実験18例ほか多数のコラムから構成され、学校教育などにおいて役立つ内容となりました。

文化土壌学部会は、人間が自然に働きかけて形成された、生活・技術・学問・芸術・宗教など文化、歴史および風土と土壌との関わりを、主として「時間」の軸から研究する部会であり、土壌・肥料・植物栄養学と歴史・文化の関係について広い視野から研究・評価・提言を行い、土壌・肥料・植物栄養学の将来にわたる発展に寄与することを目的とします。土壌・肥料・植物栄養学史も含まれます。

農業生産力の向上に大きく貢献するリン酸は、近代土壌学の研究史のうでで主要な課題のひとつでした。また最近では、世界的なリン酸肥料の価格高騰が農業における重要な問題になっています。これらのことは、リン酸が文化土壌学の格好なテーマであることを意味します。そこで、日本土壌肥料学会編『文化土壌学からみたリンの姿』（博友社2010）を出版し、肥料資源としてのリン鉱石が登場するに到った19世紀の時代的背景、ナイトソイルを肥料資源としたイギリスの施肥農業の歴史、リン枯渇にむけた有機性廃棄物の活用、生物地球化学的なリン循環の総合的評価、植物系におけるリンの拡散と濃縮、ヒトの生体内におけるリンの挙動と収支、17～20世紀に活躍した農学者らによる有機物循環に関する思想と科学、に關した論文を掲載し、文化土壌学の一例を紹介しました。



図1. 「土をどう教えるか」